

## 特集「日中戦争期の外地における 日本の宗教活動」について

日中戦争期には東アジアだけでなく、東南アジア、太平洋地域、さらにはアメリカ大陸などにおいて日本の宗教教団が活動を展開していた。近年こうした活動については振り返ることが少なくなってしまったが、特に日中戦争の問題を考える時に欠くことができないテーマの一つである。これらの宗教や文化の側面は戦後も大きなつながりを残していて、戦後のアジアを考えるためにも必要な事項である。それにもかかわらず資料の収集も遅れ、関係者から聞き取ることもしていない。このままではこうした事実が歴史から消えてしまうのではないかと恐れ

る。

すでに先行研究もあるが、しかしその数は大変少なく、多くの事実がそのままになっている。近年木場明志らを中心としたグループが研究を始めているが、それも全体を見通すところまでは行っていない。また宗派としても金光教、天理教、キリスト教などで調査や検討をしているが、まだ宗派のなかに留まっているように感じている。今回はそうした状況を踏まえての企画である。それぞれの論文は不十分なものであるが、次の一步を踏み出すためのものとした。

## 満洲国時代の宗教教団の活動と教育

槻木 瑞生

### 一．宗教と教育について

1. 教育の構造について
2. 宗教と教育
3. 国民国家の成立と宗教教団
4. 宗教から見直す

### 二．間島の教団とその施設

1. 本稿の基礎とした資料と方法
2. 資料の成立とその意味
3. 間島の寺院、教会
4. 日本の宗教活動
5. 日本の教団と教育活動
6. キリスト教系教会の教育活動

### 三．朝鮮の伝統的宗派と教育

キーワード：宗教教団、学校、間島

本稿のねらいは満洲国時代の中国東北の教育の構造を、宗教教団の活動をとおして確認してみようとするところにある。教育活動とは学校のように目に見えるものばかりではないことは当然ではあるが、目に見えない部分の持つ力についても無視出来ないものがある。そうした部分に少しでもせまることによって、中国の社会

を維持し、変革していく源を探りたいと思う。

## 一．宗教と教育について

### 1．教育の構造について

戦前、戦後をととして東アジア研究、特に教育史研究では、教育といえば学校を指すものと考えられてきた。だから設置された学校の数や学校で行った教育の内容が問題となり、引いてはそれがその土地の教育水準を表すものとしてきた。確かに学校への就学率などはその社会の教育の水準を表す重要な指標の一つであるが、しかし近代以前の、学校と呼ばれる施設が無い時代にも教育が行われてきたことは明らかである。その学校の無い時代の教育の水準は何で計るのだろうか。これまで考えられてきた就学率や学校数などでは不可能である。そのためにこれまで近代学校が成立していない時期の社会、あるいは近代学校が成立し始めている社会の教育の水準については、これまで十分に検討されてこなかった。いや現代でも学校が関与しない教育については社会教育や家庭教育として考えられているとはいえ、社会のなかの役割について正面から見つめられてはいなかったのではないだろうか。特に宗教施設を教育施設の一環として考えることはなかった。

数年前のこと、満洲国時代に少年期を生きたある中国人軍人が使った教科書の一そろいを見る機会があった。その中には『文教部審定 国語教科書』、『国民優級学校 満語国民読本』など満洲国が定めた教科書があった。それとともに『千字文』、『弟子規』、『莊農雜事』、『名賢集』、『新国語做影』、『最新簡明珠算課本』のような中国の伝統的な民間教科書、すなわち「千字文」や「三字経」の類の冊子が数多くあった。

これらの「千字文」や「三字経」の冊子は明らかに学校で使われたものではない。しかしこ

の三字経の冊子から、満洲国期に学校へ入学する以前から人々がこうした三字経の類の教科書から多くの知識を得ていたことが推測できた。だからこそ中国東北の住民は満洲国が設定した学校に就学することを強要されても、その教育を受け止めて自分たちなりにこなす力があったのだと思われる。満洲国は壮大な学校制度を設定したが、しかし少数の日本人の思いだけで運営することは不可能であった。結局のところ満洲国の教育制度は、中国の伝統的な教育の成果の上に乗って初めて動いたのである。満洲国の教育が日本の政策と中国の伝統とが絡み合っていたことを押さえなければならない。

国や地域の教育は、政策から見る側面と、それを受け止めた人々から見る側面という二つの面がある。これは満洲国の教育ばかりではない。だから満洲国の教育を知るには満洲国の支配者の意図をつかむとともに、支配されながら、なお自らの教育を推進しようとしていた人々の意識も知らなければならない。この満洲国の学校制度の外にあった世界を教育の構造の一つとして捉え、学校教育とどのように重なっていたのかを考えなければならない。そしてこの三字経の世界と伝統的な宗教や儒教との繋がりも視野に入れる必要がある。

先に述べた満洲国期の三字経から、中国東北の人々が満洲国政府の政策をどのように利用しようとしていたのか、それを読みとることもできる。例えばこの三字経には「清順治 據神京

至十傳 宣統遜 民国興 二十稔 滿洲變  
起干戈 樹木幟 號孝德…」などという文章がある。その傍らには満洲国の国旗が描かれた「滿洲起義図」がある。そしてこの文章の後に「昔仲尼 師項堯 古聖賢 尚勤學 趙中令 読魯論 彼既仕 學且勤」などの中国の伝統的な教育意識を表す文が続く。そのことから人々の間には伝統的な教育基盤が生きていて、それ

と満洲国の教育が葛藤していたことが分かる。葛藤しながらも自分たちの思いを通そうとしていることも分かる。

この三字経の教育が行われていた場合は、満洲国から考えれば私塾の教育に分類されるかもしれない。あるいは私塾の統計にさえも出てこない、満洲国の行政の意識の範疇の外にあったのかもしれない。あるいは「古くて非合理」なものとして無視されていたかもしれない。だからこうしたものは政府の教育統計や調査報告には、あっても僅かな記載しか見られない。それでもこうした教育機能が東北の社会にあったことは間違いない。宗教の教育活動にはおもてに表れにくい部分がある。先の三字経の冊子の間に、表紙に『馬可 福音 聖書公会』と書かれた冊子が挟まっていた。その中には詩篇107篇第30節のことばとともに「加利利之海辺」と題した挿絵が掲げられていた。これはキリスト教聖書のマルコ伝であろうし、挿絵は聖書に出て来るガリラヤの海のことであろう。厳しい統制の下にあった満洲国の時代に、あるいは民家の一室で密かにこの冊子が使われたかもしれない。そして聖書や法話を通して道徳や生活の技術が伝えられたのだろう。特に欧米系の教団や牧師からは「近代的」な知識が伝えられる可能性があった。その意味で満洲におけるこうしたキリスト教系教会の教育力は注目しておいて良いだろう。

## 2. 宗教と教育

近代学校以前の社会にも、多様な教育機能があった。そのなかで大きかったのは宗教教団が行った教育である。これは日本の寺子屋を持ち出すまでもない。そして学校教育の外にあった宗教関係者の教育は、間島でも見られた。

宗教とは非合理的な論理というよりは、生活の中から生まれた論理というべきである。生活の中の知恵を組織すれば、生活の中の宗教から教育機能が生まれてくる。それを受けて日本の江戸期では宗教教団が寺子屋を組織化して、ついには高等教育に至る学校体系さえも作りだしていた。

中国では1904年に奏定学堂章定が出され、中国として初めて公的な国民教育に取り組むことになった。それを受けて東北地区でも、例えば、1906年には哈爾濱の遙か北にある海倫県でも最初の公立学校が作られる。間島でも事情はほぼ同じで1908年に最初の公立学校が延吉で作られた。間島朝鮮人にとってこの公立学校に入ることが、一つの教育を受ける機会であった。

しかし中国側の公立学校以外にも間島には多くの私立の教育施設があった。現在記録に残っている最初の私立の教育施設としては、これまでは1906年に設立された龍井村の瑞甸書塾であったとされてきた<sup>(1)</sup>。しかし朝鮮半島には既に多数の書堂(私塾)があったこと、その朝鮮半島から多くの朝鮮人移民が間島に来ていたことから、瑞甸書塾以前にも多くの私塾があったと推測できよう。実際に1900年に龍井天主教会ができ、その天主教会が1905年に三愛学校を設立したという記録がある<sup>(2)</sup>。この記録の真偽について、また三愛学校の性格についてはまだ裏付ける資料はないが、しかし間島朝鮮人の教育施設設立について、かなり早くから宗教団体が関与していたことも確かであろう。

それもただ施設を作ったというだけではない。1920年代に龍井には光明(永新)、恩真、明信、東興などの中学校があった。この他にも幾つか中学校が設立されたケースもあるが、この龍井の中学校は間島の教育の中心であり、多数

(1) 『延辺朝鮮族自治州教育志』1992. 11

其他布教関係一件』

(2) 外務省記録『満洲国及中国ニ於ケル神社教会廟宇

の卒業生と多くの人材を輩出したことで有名である。そしてこれらは公的な力によって設立されたものでないばかりか、公的な計画によって初等学校につながる中等教育機関となったものでもない。これらの中学校はすべて宗教教団の手によって作られたもので、光明中学については内々で朝鮮総督府の援助があったものの、それでも他の三校とともに私立学校であった。そして私立として初等から中等という学校体系を生み出す第一歩を踏み出していたのである。

### 3. 国民国家の成立と宗教教団

近代国家は、地域に住んでいた民族やその地域の文化に関係なく、いわば適当なところに国境を引くことから始まる。当然のことだがその国境の中には、多様な民族と異質な文化が混在していた。多様な地域を国として統一し、まとめるためには、住民の間に共通の知識と共通のことばを広める必要がある。方言ではない国民共通のことば（共通語）と共通の知識（国定教科書）は国民としての意識を作り出し、他の国家からの干渉にも耐えられる国民を生み出すことができる。これは日本だけではない。中国でも孫文が共通の知識やことばの普及に固執したのも、そうした観点からである。

科学的な根拠から作られた知識であれば、共通の知識として人々に受け入れられやすい。近代の学校で自然科学や数学のような教科、それを取り入れるための手段として外国語が重要視されたのは、そのことを考えたからである。しかしかならずしも科学的な知識ばかりが近代学校で教えられたわけではない。明治以降の日本の近代学校でも、神話を基礎とした知識を教えていた。また間島へ移住してきた朝鮮人も日本側が設立した学校に対抗して多くの学校を作っ

たが、その学校でも神話に基づいた朝鮮史（東国史）を教えたところが数多くあった。そうした意味で宗教や神話は近代の学校にとって欠くことができないものであった。

しかし共通の知識として国が選択した神とは、異なる神々がどこの国にもいる。これらについては国の教育から排除しなければならない。そのために国の作った教科書に出て来る神と異なるものを、「教育と宗教の分離」という論理で排除した。国に認められた「正当な」神以外は、「科学的根拠のない古いもの」、「非合理的なもの」とされた。これらは近代の学校、国民教育に差し障りがあったのである。こうした意味で近代学校の教科では、道徳（修身・宗教）、国語（共通語）、地理、歴史が重視された。

1929年の延吉県の私塾の調査では、教科目として「国文、三字経、四書」や「千字文、論語、孟子」などを掲げるところが多かった。それでも「国文、算術、理科、史地、作文」などを掲げるところがないこともないが<sup>(3)</sup>、これが公立学校になると、例えば1932年の調査では「国語、修身、歴史、地理、日語、算術、自然、経学」や、「国文、算術、地理、歴史、自然、児童心理、教育、小学行政、経学、修身、日語、英語、唱歌、体育、手工、図画」などとなる。

宗教関係学校の場合には1933年の調査で「国語（日本語）、朝鮮語、算数、地理、歴史、唱歌、体操、習字、満洲語」（耶蘇安息日）、「国語（日本語）、朝鮮語、算数、地理、歴史、唱歌、体操、習字、満語、聖經」（天主教 海星学校）、「朝鮮語、編物、算術、音楽、料理」（監理会 東明女学校）等の教科目が挙げられている<sup>(4)</sup>。

国民国家を作るための教育組織の条件は少なくとも二つある。一つはすべての国民を学校に取り込むための公立学校を全域につくることで

(3) 『延吉県私塾調査表 民国十八年九月』延辺朝鮮族自治州档案館所蔵

(4) 外務省亜細亞局『在満朝鮮人概況』昭和8年9月



ある。1932年の調査では、延吉県に56校、和龍県では13校、琿春県で42校、汪清県で32校の、公立学校があった。双陽県に102校、長春県に68校あったのに比べれば少な目であるが、それでも満洲事変直前までに間島でもそれぞれの県全体を覆う公立学校の組織ができていた。

もう一つの条件は先に述べた学校体系である。高等教育機関については既に満鉄沿線に中国側学校、日本側学校と合わせて、ミッション系の高等教育機関も作られていた。間島では間島全域に広がる多数の私立初等教育機関や施設が、どのように高等教育機関に繋がるかという問題があった。言い換えるならば初等教育と高等教育を結ぶ中等教育機関や施設が存在である。1930年までに龍井にはある程度の中等教育機関ができていて、満洲事変までには中国側、日本側の高等教育機関につなげることが可能になってきていた。ただ朝鮮人の手になる高等教育機関がないために、間島の学校を卒業した朝鮮人が日本側の満洲国学校に取り込まれるか、中国側学校に入るかという問題になっていた。

#### 4. 宗教から見直す

ここまでかなり荒く間島の教育と宗教について記してきた。しかし今日までの所満洲の教育研究で、宗教が果たした役割について意識した研究はほとんど見られない。そして宗教にはもっと多くの課題に広がるものがある。例えば開拓団の問題である。

満洲国時代には欧米系ローマカトリックの開拓村、いわゆる「天主村」が100以上もあったという。日中戦争末期に日本基督教団も東北の長嶺子と太平鎮に開拓団を送るが、この開拓団を送るにあたって日本基督教団はこの天主村を参考にしたという。これまで「満洲開拓団」は日本独自の発想と考えられてきたが、宗教という観点を取り入れると日本の開拓政策と欧米の

ミッションとの複雑な関係が見えてくる。そして開拓団にかならずあった学校が問題になってくる。

もともと満洲と呼ばれた地域は多くの地域から多様な移民が流れ込んだところである。そのなかで日本が日本独自の発想を推し進めようとしても、推し進められるわけがない。日本としても多くの他民族や文化の動向を見定めて政策を展開していた。そうなれば「満洲開拓団」の問題を、欧米系の宗教教団の活動から見ることも必要であろう。

また教育については、朝鮮半島から移住してきた人々の伝統的な信仰と生活のあり方から見ることが可能であろう。宗教からも新しい側面が見えてくる。

## 二. 間島の教団とその施設

### 1. 本稿の基礎とした資料と方法

本稿では以上の点を踏まえて、満洲国期の中国間島における宗教教団の教育活動を検討する。本稿の検討が間島におけるすべての教育構造を明らかにできるものではない。ただ間島の学校を取り巻いていたもう一つの世界に近づこうとするものである。しかしこれはどこまでも最初の一步であって、結論ではない。多くを今後の研究に待つものである。

資料としては外務省外交資料館所蔵の『満洲国及中国二於ケル神社寺院教会廟宇其他布教所関係一件』全7巻を使った。この史料には以下に記すようにさまざまな限界がある。この限界を補うために本来は他の資料と突合わせて見る必要がある。例えば欧米ミッション系の教団の教育活動については戦前に外務省が公刊した記録があり、外務省記録や其の他の記録などにも数多くの記述がある。しかし今回はまず間島の全体状況を押さえるために、この史料から読み

とれるものを探してみた。

## 2. 資料の成立とその意味

昭和11年6月6日に外務省令第9号「在満洲国及中華民国寺院、教会、廟宇其ノ他ノ布教所規則」が発令された。本資料はこの省令に従って関係領事館から外務省に送られた報告書を綴じたものである。勿論この資料にはすべての報告が綴じ込まれているわけではなく、十分な記録がない部分がある。記録を紛失した場合もあり、調査が不十分な場合もある。そのためにこの資料で間島の教団の教育活動すべてを明らかにすることは不可能である。しかし今日ではこの資料が満洲や中国での教団の活動を、もっとも詳しく伝えるものであることも確かである。

ここに集められた記録は1936年(昭和11・康德3)の状況を記したものである。これに先立つ満洲事変前後の時期は、日中の戦闘やいわゆる「共匪」などによって多くの教会が破壊されて、満洲、間島に於ける宗教活動が停滞した時期であった。それに対してこの時期には満洲国の統治が東北各地に浸透し始め、朝鮮人関係の教団が間島一帯に展開をしていく。それを受けて日本からも多くの教団が渡来して、多様な活動を始めた。この外務省令第9号の「規則」も日本政府が満洲統治のための準備として、満洲や中国にあった日本の占領地で大きく変化している宗教教団の状況を把握しようとしたものである。

調査の対象は教会や礼拝堂、集会所など、ある意味で公的な施設を持った宗教団体であった。このために宗教活動をしていても個人の自宅で集会を開いているような場合は、一部を除いて調査の対象にはなっていない。ただちよつとした記述から、教会などの公的な施設がなくても、間島ではいろいろな宗教活動が展開されていることを読みとることは可能であ

る。本来はそうした私的な宗教活動こそ教育に大きな影響を持ったのである。

この外務省令第9号はそれぞれの教団に、かなり細かい事項の報告を求めている。教団の名称、宗派、本尊などは当然としても、建物の構造、僧侶の学歴、履歴、資格さらには布教所の廃止の日、合併の日、移転した日、維持費用の捻出方法、信者の代表者の氏名、住所、教団の沿革などにいたるまで報告させている。

明朝、清朝の時代は中央政府や省政府の直接支配は、県段階までしか届かなかったと言われる。それに対してこの「規則」から分かるように日本側は村落の小さな教会や寺院の実態まで手を伸ばそうとしていた。こうした点から考えると日本の支配は、もう一步を進めて一人一人の信仰のレベルまで降りて行こうとしていたし、この調査はそのためのものである。

## 3. 間島の寺院、教会

付表はこの史料の中から間島の寺院、教会、布教所などを抜書きして整理したものである。この場合の間島とは今日の延辺朝鮮族自治州にある延吉県、和龍県、琿春県、汪清県とほぼ重なる地域を意味している。この時期に間島の中心となっていた都市は、龍井、延吉、琿春などであり、図們は朝鮮半島から間島へわたる重要な門戸となっていた。

間島とはもとは朝鮮人が使った呼び名と言われるが、朝鮮半島から多くの移民が来たことから一般的な地名とみなされるようになっていた。朝鮮半島から大陸への移民は、一つは咸鏡北道から、一つは平安北道から入ってきている。間島は咸鏡北道からの移民を受け入れた土地であり、大陸でも朝鮮人移民が集中した地域の一つであった。また単に受け入れただけでなく、そこからさらに大陸奥地に朝鮮人移民を送出す中継地の役割も果たしていた。朝鮮人は日

本の大陸政策にとって重要な対象であったから、その意味でも間島は日本の大陸政策の大切な拠点のひとつであった。

間島事件などを含めて日本は何回か間島を軍事的に制圧しようとした。しかし、軍事的、政治的な施策だけでは、在留朝鮮人は簡単に日本の統制下に入ることはなかった。軍事的、政治的に間島を統制できないとすれば、教育政策、宗教政策は重要である。その上に間島は欧米系のミッシェンの活動、中国側の教育政策、そして在留朝鮮人自身の手になる宗教・教育活動などが入り混じって動いていた地域である。以下では前記の『布教関係一件』から読み取れることを並べて、先ずは全体の状況を押さえておきたい。

今回この『布教関係一件』で確認できたものは、神社6ヶ所を含めると169の宗教施設である。ただこの『布教関係一件』第6巻に綴じこまれている「間島地方宗教一覽図」(1936.6)によれば、間島の宗教施設は総計224ヶ所になるという。ただし「一覽図」には神社が含まれていないから、これに神社を勘定に入れると、間島には少なくとも230ヶ所以上の施設があったことになる。

「一覽図」によれば、朝鮮人関係でもっとも数が多いのはカナダ長老会系の教会で57ヶ所、天主公会系が32ヶ所、監理会教会が16ヶ所、その他のキリスト教系の安息日会や聖潔教会、また伝統的な宗教に属する天道教、侍天教、大成儒教、孔教会、仏教系など総計で165ヶ所となっている。

「満洲人」関係では仏教系14ヶ所、在理教13ヶ所、その他イスラム教、キリスト教、道教、紅卍字会などで、総計42ヶ所である。

また民族別に施設の数を見ると朝鮮人系の施設が全体の70%を超えていて、この民族別施設の数ほぼ間島の民族別人口比に見合うものに

なっている。しかしその朝鮮人系の施設を宗派別で見ると、75%以上がキリスト教系の教会である。教会の数がかならずしも信者の数に比例するわけではないが、大雑把に見れば在留朝鮮人にはキリスト教信者が圧倒的に多かったと言えるであろう。

#### 4. 日本の宗教活動

「一覽図」には神社が入っていないように、日本側資料では神社を宗教に入れる場合と入れない場合がある。その分類の問題はともかくとして、日本側がなぜ神社を設置したかについて『布教関係一件』に収められた報告書にはいろいろな事情が書いてある。

その一つが熱河省の赤峰神社である。同神社の報告書には設立の目的を「赤峰在留日本帝国臣民ハ既ニ一千名ヲ超ユルモ未ダ精神的結合ノ中心ナキヲ遺憾トシ…神社ヲ奉建…」としている。そして山城鎮の西安神社では「祖国日本ヲ深く意識セシムル目的」と端的なことばを並べる。これに対して熱河省の圍場神社では「伝統日本ノ有スル莊嚴ナル敬神崇祖ノ信念ヲ移植シ五族相集ヒテ敬神ノ赤誠ヲ捧グルコトニヨリ自ツト民心ノ融和ヲ図リ…」と述べている。また承德にあった灤平神社では「日滿融合統化ニヨリ渾然一体道義国家建設ノ企図」と記している。前者は在留日本人の精神的な支えとして神社を設立し、後者は満洲国に住む「諸民族の融合」が目的で、いわば統治のための一つの機関として設立している。

以上は間島以外の地域の例である。これに対して間島の神社の設立の目的について、かならずしも明確な記述がない。しかし百草溝神社が「内鮮満人ノ寄付」でできたと書いているので、これは後者の例であろうし、他の大部分の神社は前者の例かと思われる。

日本側施設が中国人に布教することを目的と

したケースは、『布教関係一件』に掲載されているかぎりではかならずしも多くはない。幾つか挙げるとするとつぎのようなものがある。この『布教関係一件』にハルビン総領事から在満洲国大使に送られた「日蓮宗日本山妙法寺住職吉田信教ノ対満人布教工作二関スル件」(1937. 3. 27)がある。この報告は吉田の布教活動に疑念を抱いてのものであるが、それはともかくとして吉田の活動は対「満人」であることは明らかである。また承德にあった基督教布教所の福井二郎は、東京の満洲伝道会から派遣されてきた牧師であった。満洲伝道会は日本キリスト教会、日本メソジスト教会、日本組合教会などで組織したものであるが、福井は「満洲国人ニ対シ基督教ノ伝道ヲ目的トス」と明確に述べている。満洲伝道会は開通県坐坦満洲基督教会、黒竜江省の洮南満洲基督教会など、この他にも幾つかの「満人」伝道を目的とする教会を作ろうとしていたようである。

これに対して間島の朝鮮人へ布教しようとする動きはかなりあった。大谷派本願寺局子街布教所の天児晃は「内鮮満人ヘノ開教ニ従事」してきたと書いている。天児は局子街語学校を布教所に附設するが、これも朝鮮人を対象としたものである。また同じ大谷派本願寺の龍井布教所も朝鮮人布教を目ざしているとしている。本派本願寺の図們布教所では三島一平の手で日満語学校が作られたが、この学校の主な対象は日本人だけではなく朝鮮人も含まれている。やはりここでも朝鮮人布教が視野に入っていた。

しかし大谷派も本派も朝鮮人や「満人」布教だけを目標としているのではなく、布教所の活動は「布教伝道並社会公共事業ノ一端」(大谷派

朝陽川本願寺)として、日本人を中心とする間島在留者一般を対象としていたようである。大谷派の天児晃は、局子街には神社がないのでそれに代わるものとして局子街布教所を靖国寺と改名すると届け出ている。ここでは先に述べた例と同じように、布教所を間島の多民族統治機関の一つとして意識している。

曹洞宗間島別院は曹洞宗が自らの発意で設置したものではなく、朝鮮総督府から資金と示唆を受けて開設したものである。そのために曹洞宗の本山としては間島別院を最初は朝鮮人布教のためとは明確に考えていなかったふしがある。しかし別院住職の谷洞水は広範な朝鮮人布教事業を展開していく。まず別院の付属施設として星華女学校という朝鮮人子弟を対象とした学校を作る。また朝鮮人金凌山から私財を受けて、朝鮮人布教を目的とした普照寺という末寺を作る。そしてこの末寺の設立にあたって、「満人篤信者ヨリ万余坪ノ土地」を譲り受けたとも言う。さらに間島別院住職が末寺普照寺の住職を兼務するに当たって、間島別院から「間島駐在布教師 谷洞水 当別院末寺普照寺主任ヲ命ジ朝鮮人ノ布教ニ従事スベシ」と記した資格証明書を発行されている。こうした事情を見ると朝鮮人布教に力が入っていたことが分かる。ただ、これらの活動は住職の谷の意向から出てきたというよりも、その背景にいた朝鮮総督府の指示をうけて行われたものであろう。

## 5. 日本の教団と教育活動

間島における日本側教育活動で最大のものは、龍井にあった日高丙子郎の光明中学校である<sup>(5)</sup>。日高は浄土宗光明寺派の信者であり、光

(5) 槻木瑞生「アジアにおける日本の宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書」『同朋大学仏教文化研究所紀要』第22巻

槻木瑞生・北原拓也「中国吉林省間島光明学校の展開―「満州」における日本の朝鮮族教育と日高丙

子郎」『平成4・5年度科学研究費研究成果報告書 戦前日本の植民地教育政策に関する総合的研究』

槻木瑞生「大陸布教と教育活動―日中戦争下の日語学校」『同朋福祉』第2号

槻木瑞生「満洲開教と曹洞宗―異民族への教育活



明中学の名前もそのことから出てきている。それでも浄土宗は宗派として光明学校を設立しているわけではないので、この『布教関係一件』には光明中学校のことは全く出てこない。光明中学校は1920年代に既に間島の中心的中等教育機関になっていた。1940年前後にはその他の中等教育機関も増えて中等学校に通う生徒も急速に増加する。1942年までに間島全体の中等学校卒業生は総計3,483名となっていた。このうち光明関係者は1,031名で、全体の三割近くにもなる<sup>(6)</sup>。

この光明学校は朝鮮総督府と強い結びつきがあったことが分かっている。そのために、光明学校の卒業生からの聞き取りによると、日高の力は龍井にあった日本総領事館よりも強いものがあったという<sup>(7)</sup>。

これに対して曹洞宗間島別院の場合は、住職と朝鮮総督府との関係がもう一つ強くなかった。そのために相当な費用が付き込まれたにもかかわらず、中心になって活動していた住職の谷は途中で帰国し、星華学校も規模の小さな学校のままであった。

同じ龍井という小さな街に、しかも既に初等学校から中等学校まで持つ光明という大きな学園があるのに、もう一つ作ろうとしたことに無理があったのかもしれない。

かつて総督府は間島の朝鮮人私塾へ直接に補助金を与えて、日本側の教育を行わせようとしたことがある。この補助学校策は日中の軋轢や朝鮮人からの反発を受けて失敗する。その経験を踏まえて今回は宗派を使って間接に日本側教育を導入しようとしたのであろう。しかしすべ

てが旨く運ぶことはなかった。

本派、大谷派本願寺の場合は規模の小さな語学校で、その実態は明らかでない。それでも天児の動きを見ると、総督府との関連は分らないが、先に述べたように間島在留朝鮮人を統治する機関として寺院を運営しようとしていたように推測される。

これらの動きの背景には朝鮮総督府の動きだけでなく、日本政府の動きもあることを押さえないといけない<sup>(8)</sup>。ただここでは分析する余裕がないので省いておく。

## 6. キリスト教系教会の教育活動

『布教関係一件』には朝鮮耶蘇教会系、朝鮮監理会系、天主会系、その他の教会関係報告書が綴じ込まれている。いずれもドイツ、カナダ、イギリス、アメリカなどのミッション系のものが相当に多い。しかもミッション系のものには付帯事業として教育事業がかなりあることが特色である。

この中には明信学校、恩真学校、海星学校など間島の有力な学校がある。恩真学校は光明学校に次ぐ多数の卒業生を出した学校であること、明信学校は恩真学校の姉妹校であって戦後も同窓会が作られていたことなどは分かっているが、その教育の実態については明らかになっていない。さらにそれ以外の学校については名前が記録されていただけで、どのような学校なのか全くと言ってよいほど分かっていない。

ただ設立された年代について見ると、日本系のものがほとんど1930年代の満洲事変以後であるのに、キリスト教系のものは1910年代から

動を中心に」『学術振興会科学研究費補助金 植民地期東北地域における宗教の総合的研究』など

(6) 一光会『一光会会報 創刊号』康德10年6月(一光会は光明学校卒業生の同窓会)

(7) ただ一つ付け加えておくと、日高の活動は単なる浄土宗という宗派だけの問題ではない。日高に

ついては長春(新京)にあった王道書院というある種の儒教思想を持つグループとの関係を検討しなければならないだろう。満洲の教育全体がそうであるが、間島も単純に宗派だけで割り切ることは危険であると考えている。

(8) 大東論文注(49)、本誌39頁参照

1920年代のことが多い。一般に間島で学校が多く設立された年代には幾つかの山があるが、大雑把に言えば1912～16年、1919～22年、1926～31年、そして満洲事変後が多数の学校が設立された時期である。キリスト教系のものはこうした時期に作られたものが多い。こうしてみれば満洲事変勃発までは、数多くの私塾とともにキリスト教系学校が間島全域にわたって朝鮮族教育の基盤を支えていたことが分かる。安定した公権力がない間島では学校を安定して支持できるのは宗教教団であつたし、欧米系の「近代的」知識を持ち込むことができたのはミッション系であったことを考えると、キリスト教系学校の意味は大きい。

### 三. 朝鮮の伝統的宗派と教育

朝鮮の伝統的な教育活動については十分な資料を見ることができず、明確なことは分かっていない。侍天教は活発な活動をしているようだが、キリスト教系教会や学校の陰に隠れて実態をつかむことができていない。儒教系については、学校というよりも施設あるいは日常生活の中の教育と見た方がよいのかもしれない。そうすれば一族共同体の教育機能として考え、おそらく、朝鮮半島の村落のあり方から見直して間島の村落の問題と比較することが必要であろう。

直接に宗派と関係はしない教育施設であるが、和龍県明東村には金躍淵が作った書塾の圭巖齋（1908）があつた<sup>(9)</sup>。作られて間もなく圭巖齋は明東書塾あるいは明東学校となる。圭巖齋がなぜ明東学校という近代学校を目指した

のだろうか。

明東学校では漢学を教え、生徒には儒教倫理を厳しく要求したという。その一方で旧韓国時代の教科書を使い、日本の数学の教科書を使うという近代教育を目指していた。さらにキリスト教関係者を教員として採用したともいう。このことは伝統的な儒教教育から近代教育への転換を意味したものであろうか。儒教教育の上に近代教育を作ろうとしたと言ふべきだろうか。このあたりは大きな課題ではあるが、ほとんど不明のままである。

日本の教育やキリスト教の教育の基盤には、伝統的な朝鮮人の教育があつたはずである。それをつかむためには、もう少し儒教など伝統的宗派の教育の問題を知らなければならない。しかしこうした問題には『布教関係一件』は余り有効ではない。新しい資料と視点が求められるところである。

(9) 李智澤「北間島」『アジア公論』1973. 3～5

この論文はいわゆる研究書ではない。そのためどのような資料を使ったのか不明である。また翻訳したものなのだろうか、日本語がかなり乱れている部分がある。しかし戦後になって日本で間島問題を取

り上げた最も初期のものである。

李智澤 1899. 10. 29～1976. 4. 2 平安南道江西郡生まれ。ソウル中央普通学校で自由を絶叫したとされている。1928. 2. 15 西大門刑務所に収容される。高麗革命軍に関係した。

付表

宗 派	名 前	設立年	所 在	付属施設その他
曹洞宗	東満山琿春寺	1916. 6	琿春西門外	星華女学校
曹洞宗	曹洞宗布教所	1934. 6	図們春風街	
曹洞宗	曹洞宗両大本山間島別院 (延和山龍井寺)	1923. 3	龍井村新市街	
曹洞宗	間島別院末寺普照寺	1925. 3	龍井村新村	
臨済宗				金陵山の私財による朝 鮮人布教を目的満人才 余坪の私財を受ける
妙心寺派	臨済宗八葉山江嶽寺	1934.10	汪清春華郷	
臨済宗				管長の命 李昇旻
妙心寺派	臨江山妙心寺布教所	1934.12	吉林四絡路	
浄土宗	浄土宗能仁寺	1936. 2		日満語学校 (三島一平)
本派本願寺	琿春本願寺布教所	1934.10	琿春西門外	
本派本願寺	本派本願寺図們布教所	1933. 5	図們中秋街	
本派本願寺	西本願寺普石寺		琿春 石建坪	
本派本願寺	普石寺	1935. 4	和龍月晴社	布教伝道並社会公共施 設ノ一端
大谷派	東本願寺図們布教所	1933. 4	延吉図們銀河街	
大谷派	朝陽川本願寺	1933.10	間島省朝陽川	
大谷派	局子街布教所	1932. 9	延吉丁字街	
	靖国寺に改名	1937. 9		幼稚園 局子街語学校
大谷派	本願寺龍井布教所			
高野山大師 教会	吉林支部	1932. 5		幼稚園 (日人) 朝鮮人布教
高野山大師 教会	高野山大師教会		図們	
	清涼山地蔵寺	1929. 9	凉水泉子	
日蓮宗	日蓮宗布教所	1932. 4		
日蓮宗	図們布教所	1933. 6	図們春風街	
天理教	天理教集談所	1934. 4	図們中秋街	
天理教	天理教図們教会	1934. 7	図們銀河街	
天理教	吉満教会	1934.10		
天理教	天理教間島省教会	1931. 9		
金光教	金光教小教会	1935. 3	図們銀河街	

朝鮮耶蘇教 長老会	忠信場教会	1936. 8	和龍県明新社	主日学校
耶蘇長老会	大荒溝教会	1935.11	汪清県大荒溝	主日学校 1935. 4 勉励青年会 1935. 7 幼稚園 信興学校
耶蘇長老会	琿春中央教会	1914. 3	琿春西門外	
耶蘇長老会	電線村教会	1912.10	琿春電線村	
耶蘇長老会	車大人溝教会	1914	琿春車大人溝	
耶蘇長老会	新豊教会	1914	琿春新豊	
耶蘇長老会	雪帶山教会	1920	琿春雪帶山	
耶蘇長老会	紅旗河教会	1922. 7	琿春紅旗河	
耶蘇長老会	頭道溝馬家店教会	1914	頭道溝馬家店	
耶蘇長老会	哈達門教会	1932	琿春哈達門	幼稚園（満洲人のみ）
耶蘇長老会	浦恩洞教会	1917. 4	琿春浦恩洞	
耶蘇長老会	西加山教会	1923. 1		
耶蘇長老会	新興洞教会	1923. 4	琿春西加山	
耶蘇長老会	九沙坪教会	1915.10	琿春九沙坪	
耶蘇長老会	龍水洞教会	1913. 5	琿春石間板	
耶蘇長老会	全塘教会	1913. 5	琿春全塘	
耶蘇長老会	玉泉洞教会	1914. 5	琿春玉泉洞	
耶蘇長老会	馬川子教会	1934.10	琿春馬川子	
耶蘇長老会	馬滴達教会	1935. 5	琿春馬滴達	
耶蘇長老会	四道溝教会	1914.10	琿春四道溝	
耶蘇長老会	東興鎮教会	1930. 3	琿春春化保鎮	
耶蘇長老会	凉水泉子教会	1930. 2	琿春	
耶蘇長老会	石建市教会	1931. 1		
耶蘇長老会	北蛤蟆塘教会	1913.10	延吉	イギリス人牧師 幼稚園 崇信学校
耶蘇長老会	頭道溝中央教会	1913. 8		
耶蘇長老会	長才村教会	1932. 3		
耶蘇長老会	八道溝教会	1926.10		
耶蘇長老会	小灰洞教会	1916. 2		勉励青年会 幼年主日学校
耶蘇長老会	藏恩坪教会	1912. 1		
耶蘇長老会	救世洞教会	1913. 4		
耶蘇長老会	北大地教会	1926. 2		
耶蘇長老会	大邱市教会	1924. 3		
耶蘇長老会	忠信場教会	1917. 3		主日学校
耶蘇長老会	朝鮮耶蘇教長老会 中央教会	1909.10	龍井村	明信、明東、光明学園 中学部関与 カナダ系



満洲国時代の宗教教団の活動と教育

耶蘇長老会	土城堡教会	1921.10	龍井村	会寧普興学校関与
耶蘇長老会	水東村教会	1921. 2		
耶蘇長老会	明月溝教会	1922. 3		幼稚園 アメリカ系
耶蘇長老会	第一教会	1919. 1	明月溝	
耶蘇長老会	老頭溝耶蘇教長老会	1925.11	延吉老頭	溝市下場里 恵成学校
耶蘇長老会			延吉官道溝	永生学校
耶蘇長老会	南西溝耶蘇教長老会		南西溝	明新学校
耶蘇長老会				
新興学校				
耶蘇長老会	帽児山教会	1912. 3		幼年主日学校
耶蘇長老会	老頭溝泰平村耶蘇教長老会	1916. 3	老頭溝泰平村	
耶蘇長老会	太陽村教会	1915.11	和龍太陽村	啓明学校
耶蘇長老会	延寿洞教会	1911. 8	和龍	
耶蘇長老会	図們中央教会	1933. 4	図們中秋街	信聖学校
耶蘇長老会	南西溝耶蘇長老会	1913. 2		
耶蘇長老会	鐘城洞耶蘇長老会	1914. 2		
耶蘇長老会	合成里教会	1935. 4	延吉合成里	
耶蘇長老会	東山教会	1922. 8	龍井東山	恩真学校 明信学校
耶蘇長老会	合成里教会	1935.10		東山教会系
耶蘇長老会	明東教会	1909. 2	和龍明東村	幼年主日学校
				明東小学校
			和龍參開社湖泉浦	清湖学校
耶蘇長老会	萬振基教会	1908.12	和龍徳新社	
耶蘇長老会	八道河子礼拜堂	1924. 4	和龍八道河子	
耶蘇長老会	朝陽川耶蘇長老教会	1932.10	朝陽川	
耶蘇長老会	文化洞耶蘇教長老教会	1910.10	延吉文化洞	
耶蘇長老会	鶴洞教会	1935. 3	延吉鶴洞	東山教会系
耶蘇長老会	大拉子教会	1915. 9	和龍大拉子	
耶蘇長老会	茶條溝教会	1934		
朝鮮監理会	延吉教会	1925. 4		幼稚園日曜学校 1928
朝鮮監理会	琿春教会	1930.11	琿春西門外	
朝鮮監理会	敬信洞教会	1926. 9	琿春敬信村	
朝鮮監理会	九沙坪教会	1930.12	琿春九沙坪	
朝鮮監理会	草坪教会	1924.10	琿春草坪甲	
朝鮮監理会	太手川教会	1935.10	琿春太手川甲	
朝鮮監理会	東興鎮教会	1923.10	琿春鎮安甲	東興鎮東興学校校長
朝鮮監理会	基督教朝鮮監理会龍井教会	1908	聖經学院	
朝鮮監理会	百草溝教会	1925.10	三光学校	

朝鮮監理会	百草溝中央教会	1921. 1		
朝鮮監理会	大肝川礼拝堂	1924. 2		
朝鮮監理会	頭道溝教会	1922. 4		主日学校
朝鮮監理会	邱山教会			
朝鮮監理会	明月溝教会	1922. 5	明月溝	幼稚園
朝鮮監理会	図們礼拝堂	1927. 9	図們南区	
基督教復臨 安息日会	基督教復臨安息日教会	1935. 6	図們白鳳街	
安息日会	龍井教会	1926. 8	龍井村	
安息日会	朝陽川教会	1933. 8	延吉県	
安息日会	頭道溝教会	1920. 8		尋常小学校
安息日会	三道溝教会	1919.11		附属小学校
安息日会	老頭溝基督教復活安息日会	1936.5		
安息日会	三道溝教会	1919.11	和龍県明新社	小学校
天主教	朝陽川布教所	1934. 5	延吉朝陽川	
天主教	明月溝天主教会	1922	延吉明月溝	海星学校 1935 聖堂学校 修女院病院 1931
天主教	茶條溝天主教会	1911	延吉茶條溝	海星学校八道溝より 移転 1934. 6 ドイツ
天主教	八道溝聖堂	1922. 9	大嶺洞	海星学校
天主教	龍井天主教会	1900.10	龍井市	三愛学校 1905 海星学 校 1932 タルシジオ少 年会 龍井修士院 1933
天主教	延吉天主教会	1922.12	延吉貞字街	海星学校(満人) 1922.12 延吉修士院 1933 印刷所 1935 鉄工場、 木工場、農務場 1936
天主教		1936		龍井海星学校講堂に 大拉子海星学校 1936 延吉教区海星学校教育 総監部 1936. 9. 4
天主教	天主教会聖堂	1928	和龍英岩村	延吉天主教会系
天主教	新站聖堂	1935		
天主教	天主教会聖堂	1933	琿春	延吉天主教会系
天主教	天主教会聖堂	1928	敦化	延吉天主教会系
天主教	天主教会聖堂	1928	六道溝	延吉天主教会系
天主教	天主教会聖堂	1909	八道溝	延吉天主教会系

満洲国時代の宗教教団の活動と教育

天主教	天主教会聖堂	1928		学校あり
天主教	三道溝天主教会	1930	蛤■塘	延吉天主教会系
天主教	琿春天主教会凉水泉子布教所	1930. 1		明新学校の教室に設立
ローマン	八道溝天主教会	1932. 2	(汪清?)	
カトリック		1909. 5	延吉八道溝水南村	海星学校
延吉天主教 教会総本部	老頭溝天主公会	1917. 5	延吉老頭溝上市	
	基督教石建市教会			
東洋宣教会 聖潔教会	東洋宣教会聖潔教会	1926. 3	龍井	
東洋宣教会	東洋宣教会明月溝教会	1932. 6		
東洋宣教会	朝陽川教会	1934. 9	延吉朝陽川	
東洋宣教会	図們聖潔教会	1937. 1	図們南区	
東洋宣教会	聖潔教会	1927. 4	龍井村	
東亜基督教	東亜基督教隊	1911. 9	延吉	
東亜基督教会	東亜基督教隊			大母鹿溝
東亜基督教会	東亜基督教隊			鐘城洞
東亜基督教	三道溝東亜基督教会	1924. 1		
仏教禅教両 宗朝鮮仏教	甘露寺	1933. 8	図們東京洞	
両宗	百草溝千仏山新興寺	1935. 3		
両宗	広徳山延明寺	1930. 1		
両宗	寧北山大興寺	1934. 3		
両宗	青鶴山松村寺	1922. 4		太平溝
両宗	大覚教	1927. 3		
両宗	大本山普興寺	1931. 4	龍井村竜華山	
両宗	龍珠寺	1922. 7	延吉慶安郷富岩坪	
朝鮮仏教	華嚴寺	1932.10	図們灰幕洞	
朝鮮仏教	日光寺	1936. 2	図們灰幕洞	
朝鮮仏教	汪清靈仏山願成寺	1936. 5		日光寺系
天道教	石建市宗理院	1906. 3	和龍月晴社	1932. 1 に月晴社へ
天道教	三道溝天道教宗理院	1938. 5		
天道教	天道教延吉宗理院	1903. 4		
図們大仏山 日光寺	月光寺	1935.12	和龍光開社弟洞	
侍天教	侍天教間島宗務部	1910	龍井村	間島東亜小学校 1924. 6

侍天教	天宝山侍天教礼拝堂	1936. 9	天宝山	
侍天教	榆樹川布徳所	1918. 9	延吉榆樹川	榆樹川東亜学校
侍天教	侍天教頭道溝布教所	1924. 9		
侍天教	三道溝布徳侍天布教会	1926.12		初等学校補習教室
侍天教	老頭溝激本流侍天教会	1933. 9	源流	
東洋儒教	慕聖院	1935. 8		明倫堂など
儒教	崇化文廟	1922		喜捨金は文廟と明倫 学校の維持費に
大聖教 (儒教)	大聖院沿江総支院	1932. 1	石建市	
孔教会	老頭溝孔教会	1937. 3	延吉老頭溝	
崇化文廟	崇化文廟	1915.11	和龍徳化社	